

13 中国伝統医学と道教

(第二十七回 覺世真経)

吉 元 昭 治

吉元医院

「覺世真経」は正しくは「関聖帝君覺世真経」という。この関聖帝君とは関羽のことである。

元末明初、羅貫中の『三国志演義』の中で関羽の治踰は、諸葛孔明と並んで際立っている。桃園の義兄弟の契りで劉備を主とも兄ともあおぎ、張飛と共に落日の蜀を支えた。しかし呉に捕えられ遂に子の関平と共に斬られる。関羽が最期まで節を曲げなかったことで、忠義を貫き義に厚いことから次第に神聖化してくる。南朝梁にはすでに廟が建てられ祀られていたという。時代と共にその神号も、元朝文宗（一三三〇年頃）は「壮繆義勇安顕靈英濟王」、明の神宗、万曆四十二年（一六一四）に「三界伏魔大帝神威遠震尊関聖帝君」と神号を贈られ「関聖帝君」と言われるようになった。

さらに清、世祖、順治年間には「忠義神武靈佑仁勇威顯護国保民精誠毅靖贊宣德関帝大帝」という長い神名となる。それだけ世に受けられ厚い信仰になっていたことが判明する。関帝はこのように信義、忠義、武勇、護国、護民ということから、殊に信を重んじる商売の神とされるようになり、次第に万能神の性格を帯びてくる。こうして深く民衆の間にこの信仰が浸透し拡大してくると、むしろ民間信仰の形となってくる。明代以降では儒仏道の区別がつかないようにになっているが、儒教では関帝のことを「文衡帝君」または「武聖」といっている。孔子を「文聖」といい「文武廟」というと孔子と関帝を併祀されている。

関帝に関する信仰は華人社会のある処、各地に関帝廟が建立され一種のミニティーセクターとなっている。各家庭では我が国の神棚、仏壇のように赤い顔をして髭をはやしたいかめしい関帝が祀られている。

ところでこの「関聖帝覺世真経」だが、その由来は判つきりとしていない。関帝のお告げとされていて、作者もその成立年代も判つきりしていない。多分十五

世紀にはあっただろうとされている。以前発表した「太上感應篇」や「陰騭文」と内容は似ている六七〇文学からなるものである。

まず「人生れて世に在りては忠孝節義等の事を盡ちを貴ぶ」から初まりこの事を行はないものは身はこの世にあつても生を盗むものだと言き、人の心は神。神とは心で神に恥じないような心懸けが必要である。陰功を広く積み、難を救い、経文を印造し、菓をめぐみ、茶を施す。そして以下は悪行を列挙し、その行いを戒めている。善悪の分れるは善行すれば福があり、悪行すれば禍がある。人々はよくこの事を理解していれば子宝から保られ、寿命は長く、富貴高名な生涯を終えることができる。神は善人を助けるだけだから衆善奉行せよと終っている。

ここで経文を印造してあるが、関聖帝君覺世真経を初め各種善書を多数印刷し寺廟に寄附することは今でも放生（動物は放す）と共に善行とされている。

この覺世真経は「正統道義」には入っていない。「蔵外道書」には『覺世経註證』『関帝明聖経全集』がある。

前者は覺世真経の注釈で、「済志」「捨粟施茶」の事例がのっている。後者は「附録、損疑、靈籤（百籤まで）、靈驗記、戒淫言行彙選、世系図、宝誥、白文、註解」などの項目がある。

演者が集めた善書類のうち、関帝を冠名とするものは、「関聖帝君明聖真経」「関帝明聖経誦本」「関聖帝君戒淫経覺世真経」「関聖帝君明德真経」「関聖帝君降筆真経」「関帝靈驗記」等がある。

総会ではこれらと共に、日本各地の関帝廟を紹介したい。